



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

わが輩の国際ヨガDAY始末書

「小国インドの謎」オリンピック競技大会パリについて。

「インド選手の獲得メダルは男子のやり投げの銀、ほか銅が五個。金はなかった」

国・地域別メダルランキングでは72位、香港(37位)、北朝鮮(69位)に負けている。インドが過去40年間で獲得した金メダルは計2個である。

原因は、貧困、社会格差、中産階級の子どもはクラブでスポーツを楽しむが、小中学校の授業ではほとんど教えられていない。女性は肌を露出する習慣がなく、スポーツ参加が遅れてきた、のが理由。

地方分権が進んでいる民主主義国家なので、州政府の権限が強く、中国やカタールのように中央政府が主導して選手を育成することがない。(2023年8月23日毎日新聞のコラム「金言」より)

もっともな分析だ。しかし、中国や北朝鮮のように全体主義国家としてオリンピック選手を養成することに何の意味があるのか、とわが輩は言いたい。国家威信のための「メダル人間」を造って、競争心、対抗心を煽って何が楽しいの、と言いたい。国家の威信という重荷を背負わせることなく、選手個人の身体能力の発揮の場であってほしいものである。

わが輩の経験からして、確かにインドの体育教育は十分とはいえない。しかし、インドには「ヨガ教育」がある。ヨガには争う対象が存在しない。敢えていうなら対象は自分自身である。したがって対抗心や敵愾心は無用の長物である。負けることも勝つこともない。だからインドに金メダルは必要ない、とわが輩は主張する。

前置きがながくなったが、国際ヨガDAY関西2024について総括しておこう。

暑い、暑い7月8日(月)、わが輩は中之島図書館にいた。同館で7月3日(水)より6日(土)まで「ヨガ&アーユルヴェーダ展」、併設の「ヨガ・ワークショップ」が9日(火)まで開催されていた。それに先立ち、6月23日(日)万博記念公園で国際ヨガDAY関西(IDY)が実施された。

IDYは2014年9月、モディ首相が国連総会で「ヨガは平和な社会を創る最良の方法である」と推奨し、毎年6月21日を「国際ヨガDAY」とすることを決議した。

関西(インド総領事館)ではそれに呼応して、2016年に大阪城西の丸公園、2017年京都平安神宮前、2018年神戸ポートアイランド、2019年奈良平城宮跡、2020年高野山(コロナで延期)、2021年高野山大塔、2022年比叡山延暦寺、2023年伊勢と、近畿七府県を巡回実施、再び大阪に還ってきた。

関西に刺激されたのか、関東でも実施されているようだが、ここでわが輩は自慢げに言うておこう。

高野山、比叡山、伊勢の近畿三大聖地で実施できたことである。これは、ヨガ諸派の結集と各地の実行委員長および実行委員の皆さまのボランティア精神のお蔭である。

もう一つ自慢げに言っておこう。「ヨガ展」(2021)の開催である。これはインド独立75周年の記念事業として開催された。テーマは「ヨガ インドから日本へ」である。古代ヨガの発祥から近代、現代日本までのヒストリーを展示したものである。わが輩の知る限りでは、世界に類を見ないものである。ニューヨークで類似のものがあったという説もあるが、あれはアートとしての「ヨガ展」で、ワークショップなどの実技を伴うものではない。

近畿七府県では、インド政府主催の「1000人ヨガ」と呼ばれる大イベントのあと、各グループの講師がワークショップを開いた。このメリットは、ヨガ未経験者にとっては実体験できるチャンス、経験者にとっては他グループに触れるチャンスである。また主催者としては、大動員がみこめる大きな要素である。ところがどういうわけか、今年は好例のワークショップがなかった。それで誰かがニキレーシュ・ギリ総領事にコンプレインを申し立てたようである。

「大魔王、なんとかならないか」

ギリ総領事の要請(3月24日)に尻軽(いや身軽な)わが輩は、即座にM女史に相談、タッグを組んで動き出した。実は、わが輩にはすでに経験と構想があった。万博記念公園IDY関連イベントとして第3回「ヨガ展」とワークショップをすることである。それに今回はアーユルヴェーダ部門を加えることとした。ヨガとアーユルヴェーダは「健康」という共通性があるが、歴史的、思想的にも関連性がある。(注:第2回ヨガ展は滋賀県立図書館)

図書館との交渉、各講師の内諾、展示品の選定などを決めて、5月14日企画書をギリ総領事に提出したら、なんと数秒でOKがでた。(ちゃんと、吟味してくれたのかな・・・)

なんとかなる派のわが輩に比べて、しっかり者のM女史の迅速な行動でフライヤーが5月末にできあがった。このフライヤーを早めに配布すれば、6月23日IDYの相乗効果になると考えたのである。ここまで、たった二人で成し遂げた。

さて、その結果は如何に?

ヨガ展の来場者数は4日間で895名、ワークショップは7クラスx40名=280名、インド学講座金菱哲宏先生35名、ギャラリー・トーク(瓜田翔子、大麻豊)30名。延べ人数:1,240名になった。

万博記念公園IDY650名(参加登録者500+関係者)に1,240名を加えると1,890名になった。

お笑い神話5月号「鳥取のマニプリ舞踊団顛末記」に書いたように、インド政府のお手伝いをしてきた。わが輩は文化ボランティア活動を通じて、歴代の総領事と接触があった。外交官も「お仕事・職務」なので、彼らとのお付き合いは「友人」関係とは異なるものだ。ところが、7月3日にギリ総領事の送別会があったが、今回は少しニュアンスが違った。出席者が別れを惜しんで涙をながしたのである。わが輩の狭い見識によると珍しい事例だといわざるを得ない。

実をいうと、わが輩が万博記念公園IDYやヨガ展でがんばったのは、ギリ総領事のお役に立ちたいとおもったからである。万博記念公園開催に多大なる尽力をされた府庁のI氏(影の実力者)からも同じようなことを聞いた。某県のY氏からも聞いた。結局「交際交流」といっても、国と国ではなく、人と人の交流が大事なのである。それに優るものはない。